2023 年 6 月 16 日(金)

和菓子の日

今回取り寄せた夏の干菓子:高木屋(金沢市)の紙ふうせん

今日は、全国和菓子協会が 1979 年に定めた「和菓子の日」です。これは仁明(にんみょう)天皇(在位 833-850 年)が神託に基づいて、無病息災、健康招福を祈念し、元号を「めでたい」を表す「嘉祥(かしょう)」に改め、6 月 16 日に 16 の数に因んだ菓子や餅などを神前に供えたという故事に因んでいます。

そもそも「菓子」という語は、中国においては「果物」を意味し、「菓」や「果」と書き表しました。日本では「久佐久多毛能(くさくだもの)」または「古能美(このみ)」と表し、野にある木の実を取って食べたことを意味したとされています。江戸時代頃までは、菓子という語を「果物」の意味として用いていることが分かっています。ただ、平安時代には、小麦粉を練って揚げた「唐菓子(からかし)」*や飴・餅などが中国から渡来しており、室町時代には「茶菓子」として出される甘い菓子が作られています。さらには、薬として「外郎」も中国から渡来しています**。諸説はありますが、同じ頃「饅頭」も伝わっており、やがて食事以外の間食を指す言葉として「菓子」という語が使われるようになったと言われています。

いずれにせよ、和菓子は移ろう季節を色と形で抽象化したデザインした優れた芸術品でもあり、その世界は奥行きの深いものがあります。そこで、今年 7 月下旬の夏の特別講座『A 知探 Q の夏』では、私が「和菓子の世界」を開講し、生徒と共に学ぶことにしています。ご期待ください。

* 以前、校長ブログでも取り上げた京都、八坂神社前にある亀屋清永の「清浄歓喜団」という菓子にその伝統が受け継がれています。

**「外郎」と言えば、小田原城近くにある 600 年の伝統をもつ薬と和菓子の店「ういろう」には小さいながらも外郎博物館があり、その歴史を学ぶことができます。

校長　石飛 一吉